

◆書評 2 ◆

在日朝鮮人の占める空間をめぐる —検閲・カノン・女性—*

A Space for Zainichi Koreans in Post-war Japan: Censorship, Canon and Women

宋 惠媛
SONG HYEWON

大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター
Osaka University of Economics and Law, Center for Asia Pacific Partnership

キーワード

検閲 プランゲ文庫 在日朝鮮人文学 朝鮮女性 金達寿

Keywords

Censorship; Prange Collection; Zainichi Korean literature; Korean women; Kim Talsu

原稿受理日: 2019.12.3.

Quadrante, No.22 (2020), pp.79-88.

目次

はじめに

1. SCAP/GHQの検閲と在日朝鮮人
2. 金達寿と「カノン」
3. 在日朝鮮女性はどこにいるのか
おわりに

はじめに

逆井聡人『〈焼跡〉の戦後空間論』では、固着化した日本の戦後／占領期／冷戦初期の日本の空間像を、新たに描き直すことが試みられている。本書の「理論編」ともいえる〈第一部：焼跡・闇市のイメージ編成〉は、映画、文学作品、漫画、新聞記事などを題材に、被害者性と混沌のなかのエネルギーをそれぞれ含意する〈焼跡〉と〈闇市〉という、「戦後日本」の始まりを刻印する記号として認識されてきた物語を読み換え、新しい戦後空間を浮かびあがらせようとする。

本稿では、本書の「分析編」ともいえる〈第二部：戦後日本から冷戦期日本へ—国民的

地景と異郷〉の、第八章と第九章に主に焦点を当てて論じたい。「国家の枠に収まった記号的空間（26頁）」である、「国民的地景から排除された日本ならざるものを拾っていくこと（同）」が目的とされた部分である。本書では、「日本ならざるもの」として、在日朝鮮人とそのテキストにとくに着目している。従来、「焼跡」の物語の外に置かれてきた在日朝鮮人の空間を可視化させるために、「どのような視野であれば、人々の必死の抵抗を、戦後日本の周縁性の縁に陥れることなく、語る対象として取り上げられるのか（330頁、傍点引用者）」、本書はこのように問う。

在日朝鮮人という存在が周縁化されてきたように、それらの人々の表現やその批評、研究も同じく周縁化されるという悪循環は、今現在も続いている。本書はそれを断ち切るかのように、日本や米国のアカデミアの潮流と作法に則りながら、在日朝鮮人による言説そのものに正面から向き合い、緻密に読み込み、解釈し、言語化する。

* 本稿は、書評コロキウム「冷戦期東アジアと〈廃墟学〉の射程—逆井聡人『〈焼跡〉の戦後空間論』（青弓社、2018年）をめぐる—」（東京外国語大学、2019年3月）で筆者が報告した内容をもとに執筆したものである。



筆者（宋）は、植民地期から植民地以後＝冷戦の始まりにかけての時期に、朝鮮人たちが日本や米国で生み出した文化・文学を、識字、教育、女性のライティング、翻訳、マルチリンガリズムという角度から理解しようとしてきた。「在日朝鮮人文学」を、内在的に解明する可能性を追求することも、その一つの柱である。一方、本書の前提になっているのは、国民国家の枠を取り外し、在日朝鮮人文学を含む、それまで周縁化されてきた日本居住の少数者たちの文学も含めようという、「日本語文学」としての日本文学概念である。そのような「日本（語）文学」とときに交じり合いながら隣接する「在日朝鮮人文学」には、つねに権威の空洞があり、読者の不在があり、ねじれた言語問題があり、「日本文学」との不均衡な関係があると筆者は考える。この「在日朝鮮人文学」の視点から、本書で提示された新たな「焼跡」像を検討することで、本書のとくに第八章と第九章に応答したい。まず、本稿に徹底する本書に対する問いを提示してみたい。

第一は、本書で使用されている「文学研究」の方法と、実証的な「歴史学」の関係をめぐるものである。本書では、「文学研究や映画研究、さらには都市史や歴史学（351頁）」の方法が縦横無尽に使用される。このことは、新たな空間概念を提示しようという、本書の斬新さの源泉の一つとなっている。その一方で、歴史的な事象が厳密な検証を経ないまま、「文学研究」的なテキスト分析のための素材として扱われている点が、やや気になった。在日朝鮮人やその文学、歴史そのものに向き合うというより、本書で紡がれる物語にそれらを引き寄せようとしているように見えたからである。これは、占領期という特殊な歴史的時間の中で、在日朝鮮人というきわめて政治的な存在とそ

の表現を論じる際に、「文学研究」的な読みはどこまで有効なのか、という問題だとも言い換えられる。

第二は、先の引用の前半部分にある「人々の必死の抵抗」という言葉からもうかがえる、本書が前提とする抵抗者としての朝鮮人像を、どう考えるべきかという問いである。在日朝鮮人について語るときに設定されがちな、権力－反権力関係としての日本－朝鮮のみならず、硬直した組織－自由な個人、男性－女性、政治－生活といった、後者を善とする二項対立の図式に、本書も寄りかかってはいないだろうか。これは、本書第二部の、日本文学のカノンの再検討から始まり、在日朝鮮男性作家を経て、在日朝鮮女性で締めくくられるという構成自体に対する疑問とも関わるものである。

第三は、上記二つとも関連するが、本書が在日朝鮮人という「排除された側の者の目から〈異郷〉として見ることで、〈焼跡〉の虚構性をあらわに（340頁）」することを目的とするとき、在日朝鮮人自身の居場所はどこにあるのだろうかという問いである。

以上について、検閲、カノンとしての金達寿、在日朝鮮女性という観点から検討していきたい。

1. SCAP／GHQ の検閲と在日朝鮮人

2000年代以降、SCAP／GHQ（連合国最高司令官総司令部）による検閲実施期（1945～1949年）の研究は、日本や米国を中心に大きく進んできた。本書でも、「闇市ファイル」などのGHQ資料や検閲文書を用いて、議論が展開されている。第八章「異郷」の空間性では、金達寿「八・一五以後」（『新日本文学』1947年10月）の朝鮮戦争前夜の改稿問題とともに、検閲問題が扱われている¹。続く

¹ 本書第八章では、朝鮮総督府の準機関紙『京城日報』記者として働いていたという、植民地期の対日協力（「親日」）行為に言及した「八・一五以後」が、『叛乱軍』（冬芽書房、1950年）への収録時に大幅に削除されていることが論じられている。逆井暁人「在日朝鮮人文学と自己検閲——GHQ 検閲と在日朝鮮人コミュニティーの狭間にいる「編集者・金達寿」の葛藤を考える」（金ヨンロン、尾崎名津子、十重田裕一編『「言論統制」の近代を問いなおす』花鳥社、2019年）では、この改稿を「自己検閲」としてとらえ直している。ここでは、単行本刊行が朝鮮戦争勃発の一か月前だったことを根拠に、「占領軍への危惧とともに、左右含めた在日朝鮮人同胞への配慮であった可能性が高い（174頁）」と

第九章では、1948年4月24日をピークとする阪神地域での朝鮮人学校擁護闘争に対する、SCAP/GHQと日本政府による弾圧事件を特集した、『民主朝鮮』1948年6月号の検閲問題が取り上げられている。しかし、在日朝鮮人の表現物に対する検閲について本書で論じた箇所に限って言えば、その事象的論拠がほとんど示されないまま「文学研究」的な解釈が優先されているために、あまり説得力を持ち得ていないのではないだろうか²。

たとえば第九章では、『民主朝鮮』1948年6月号掲載予定だった、元容徳「民族文化擁護のために」の検閲草稿が論じられている。草稿に引かれた傍線を分析し、本来は「在日朝鮮人の主体的な運動が米ソの対立に利用されることを危惧する趣旨だった」のに、「検閲者はそうした訴えを無視するようにして、他の部分（「反動デモの弾圧政策」などの言葉）に線を引くことで注意を逸しており、占領軍と日本政府への批判として訴えようと努めている形跡が草稿からも見てとれる」（303頁、傍点引用者）と指摘する。ここでは、「訴えを無視する」、「注意を逸らす」といった、検閲者――

最終的な処分決定までに複数人が関わったが、ここでは英訳も担当した最初の検閲者を指している――の主観が存在していたことをうかがわせる表現が使用されているが、それを裏付けるような根拠は提示されていない³。

この一連の民族教育事件とその検閲を論じる際に、まず確認しておくべきは、この事件自体が、GHQおよび日本政府にとって、占領期最大の治安上の危機と認識されていたということだろう。この時期には、検閲処分の常連だった『民青時報』や『解放新聞』といった在日左派団体のメディア、日本共産党の『アカハタ』に限らず、いわゆる大衆紙も含めた広範な新聞が検閲処分を受けている。プランゲ文庫が2015年に完成させた占領期の新聞検閲グラ―一覧を見ると、当時「神戸事件」と呼ばれたこの4・24教育事件関連記事の占める比率の大きさは、際立っている。

発行に至らなかった『民主朝鮮』1948年6月号の、教育事件についてGHQや日本政府に批判的に述べた箇所には、全ての記事において削除 Delete の指示が記されている⁴。教育事件自体を主題としている記事の場合は、ど

し、「彼は在日コミュニティーの、特に左派陣営において指導的立場にあるために、自らの正当性を確保しなければならなかった。故に、繰り返し「検閲の苦勞」を長年にわたって強調することで、自己検閲の正当化を企てた（178頁）」と分析されている。だが、この結論はやや性急にみえる。たとえば、1948年に、立原正秋とみられる人物は、金達寿が自らの過去を形式的にのみ懺悔した上で、代表的な「親日」=対日協力作家である張赫宙に「君も新正『ママ』しなくてはならない」と呼びかけたことに苛立ち、「罵るものと罵られるもの、何と醜悪な光景だ」と書いている（K「後裔の街」の作者 金達寿おぼえ書」（『民主新聞』1948年4月24日）。また、金石範は評論「転向と文学」（『文芸活動』（朝鮮語）2号、1961年9月）で、年長世代の文学者たちが誰一人として転向問題、つまり「親日」問題への反省を行ってこなかったと、金達寿の「朴達の裁判」を挙げて痛烈に批判している。このことから、戦後／解放後初期に在日同胞たちからの激しい糾弾対象となった張赫宙を除いては、「解放」後の朝連系列の文学者たちの間から、過去の対日協力への反省や追及の動きは、ほぼなかったとみるべきだと筆者は考える。金達寿が改稿を行った1950年には、在日文学運動はほぼ壊滅状態にあり、朝鮮戦争開戦前夜という状況が「自らの正当性を確保」せねばならない切迫感を生んだ、とするのは、当時の文脈に沿っていないと思われる。

² たとえば第八章では、「この作品（「八・一五以後」：引用者）に検閲が施されるとすれば〔中略〕金日成への称賛や母の強制抑留などを理由にされる可能性がほぼ高かっただろう（271頁）」と指摘されている。また、金達寿の書いた「四斗樽の婆さん」が、1980年に単行本に収録されるまで未発表だった理由を検閲と結びつけ、「日本における検閲が終わる1949年11月の直前まで、民族教育弾圧をめぐる議論や描写が削除の対象になっているという事実（299頁）」があると述べてもいる。しかし、筆者の理解では、「金日成への称賛」を含んだ文学作品にしても、後述するように教育弾圧の描写にしても、削除対象になっていない例はある。

³ 本書ではこの検閲草稿が写真入りで紹介されており、そこにはたしかに傍線が引かれているのがみえる。ただ、その傍線というのは、info, delete, holdなどの指示が記入されるときに使われる線の太い鉛筆とは明らかに異っており、検閲者が読む際の補助として引いたような細いものである。そこから「注意を逸らす」ために引かれた、と結論づけることは、いずれにせよ困難なように筆者には思われる。なお、筆者がメリーランドのプランゲ文庫で閲覧した、『民主朝鮮』検閲草稿の該当箇所には、理由は不明ながら（マイクロフィルム版を閲覧したからかもしれない）、そのような傍線は見えない（Suppress印の位置や、かすれ具合は全く同一である）が、ここでは傍線があることを前提として論じる。

⁴ たとえば張斗植の評論「朝鮮人教育問題の側面」では、「一片の指令でもってわれわれの学校を閉鎖させる」「なぜ朝鮮人が朝鮮人の子弟を教育するのに朝鮮語でやってはならないのか」「日本当局の独善的な方針」等、現在進行中のこの事件に触れた、合わせて14行が削除処分を受けている。だが、この記事自体は、発表禁止処分とはなっていない。

の表現が問題であるかにかかわらず一律に Suppress の印が押されている。先の元容徳「民族文化擁護のために」も同様に、削除などの個別的な指示はなく、Suppress の印が押してあるのみである。このような状況で、検閲者の価値判断の介入や繊細な読み込みの余地があったと考えるのには、無理がないだろうか。

GHQ による検閲の実態はまだ多くが未解明のまま残されているが、その中でも、在日朝鮮人の表現物への検閲には、とくに複雑な問題が絡み合っていると筆者は考える。その理由としては、日本人の書いたものの検閲とはまた別の論理が働いていたこと、当時の在日朝鮮人の表現活動と検閲が、日本語、朝鮮語の両方で行われていたこと、文学作品の検閲例が多くないこと、そして、南朝鮮の米軍占領との関係を考慮に入れる必要があること、が挙げられよう。この項の後半は、これらの点について述べていきたい。

GHQ 内での検閲が共産主義の取締りといった様相を帯びようになる 1947 年後半に改定された、民間検閲隊発行の冊子『検閲要綱 Subject Matter Guide』⁵ の「Alien（外国人）」の項目には、報告すべき「必要事項」として、「A. 占領軍当局及び日本人より受ける待遇に関し日本に居住する外国人の発表した意見 B. 東洋に居住するナチ・ファシスト又はこれに類似の党に属する者の氏名および住所 C. 占領そのもの又は占領下に樹立されたる日本政府を顛覆せんとする意図ありと思惟される日本居住の外国人又は外国人団体の活動」の三点が挙げられている。A と C は、GHQ が共産主義団体として警戒していた在日本朝鮮人連盟

（朝連）に属する書き手、すなわち金達寿を含む、当時の在日朝鮮人作家の大半に関わるものである⁶。同じく日本という空間で、日本語で行われた検閲であっても、朝鮮人の書き手の多くははじめから報告対象だったということ、を、まず前提とすべきだろう。

また、在日朝鮮人に対する検閲の全体像は、当時の日本語メディアと朝鮮語メディアの混在状況を押さえることで、はじめて見えるものだ。占領期の主要な在日朝鮮人発行メディアの一つである朝連の準機関紙『解放新聞』も朝鮮語紙であったし、戦後から約 20 年の間に活動した在日一世作家の多くは、日本語と朝鮮語を使用したバイリンガル作家だった。後述するように、日本語でのみ活動した金達寿は、むしろ例外的な存在である。その金達寿が中心となって刊行された総合文化誌『民主朝鮮』は、占領期に発行された朝鮮人による雑誌としては最も知名度が高いが、同時期には『白民』、『高麗文藝』、『朝鮮文芸（朝鮮語版）』、『烽火』などといった朝鮮語の文芸誌も存在していた⁷。そして、こういった媒体に掲載された朝鮮語作品もまた、検閲対象となっている。

ただし、プランゲ文庫で占領期の日本語、朝鮮語媒体の検閲状況を全体的に俯瞰したとしても、文学作品の検閲例自体がごくわずかなしかない、という現実突き当たる⁸。その数少ない例から、在日朝鮮人文学の検閲の実態やその法則といったものを抽出するのは、現実問題としては極めて難しい。

その中でも、辛うじてその手がかりとなりそうな事例を挙げるなら、阪神教育闘争についての言説をめぐる二種類のテキストだろうか。

⁵ 1947 年 11 月 25 日改定版。日本語版は 1948 年 1 月 8 日以降に配布された。

⁶ 1945 年から 1960 年代半ばごろまでは、GHQ が「左派」や「極左」と分類したような朝連系列の人々からしか、ほぼ文学作品は生まれなかった。詳しくは拙著『「在日朝鮮人文学史」のために——声なき声のポリフォニー』（岩波書店、2014 年〔ソミョン出版、2019 年〕）第二章参照。

⁷ 朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成（戦後編）』第 10 巻（不二出版、2002 年）、宮本正明・宋恵媛編『続・在日朝鮮人文学資料集』（緑蔭書房、2020 年〔予定〕）等を参照。

⁸ 『民主朝鮮』誌に連載された許南麒の詩「朝鮮風物詩」には、本書でも指摘されているように、多くの検閲箇所がある。これは、詩の主題が、同時代の南朝鮮／韓国を批判するものだったためだろう。小説の検閲処分がほとんどなされていないことには、金達寿作の連載「後裔の街」に代表されるように、当時の在日作家たちが、リアルタイムで起きている出来事よりも、植民地期を扱った小説を書く傾向にあったこととも関係しているとみられる。

『民主朝鮮』の教育事件特集号には、『解放新聞』記者だった朴元俊が留置場で書いた報告「獄中報告：検挙と拳銃と棍棒」も掲載される予定だった。だが、この記事は元容徳「民族文化擁護のために」同様、発表禁止処分を受け、日の目を見ることはなかった。だがその約一年後、朴元俊が「獄中報告」とほぼ同じ内容で、朝鮮語で書いた戯曲「素人劇用脚本 군중 (群衆) 二幕三場」(『봉화 (烽火)』、1949年6月)は、現在閲覧可能な検閲原稿を見る限り、発表禁止処分を受けていない。草稿には、「このような大量検挙はわたしたちの運動で初めての弾圧であり、関東震災のときよりももっとひどいものです」ほか、3箇所が囲まれ、INFOとして英訳が付されているが、削除指定等の指示はみられない。

1948年に日本語で書かれた獄中報告が発表禁止になり、1949年の朝鮮語戯曲が発行されたとしたら、その違いは何か。それは、時期の違いなのか、GHQの教育事件に対する検閲方針の変化によるものなのか、検閲者の判断のばらつきのせいなのか、後者が朝鮮語で書かれたからなのか、文学作品だったからなのか(または詩ではなく戯曲だったからなのか)、あるいは朴元俊が検閲を警戒して「自己検閲」を行った結果なのか。比較可能な対象があれば、このようにある程度の推測も可能だが、ここから結論めいたものを引き出すためには、さらなる膨大な調査と検証の作業を要するだろう。

もう一方の米国占領地域である、南朝鮮での検閲状況との比較の視座も、在日朝鮮人に関わる検閲を考える際には不可欠である。SCAP/GHQは日本(1945年9月2日～1952年4月28日)を、在朝鮮米陸軍司令部軍政庁(南朝鮮米軍政庁)は南朝鮮(1945

年9月8日～1948年8月15日)をそれぞれ占領したが、双方の地の米軍は当然ながら密に連携していた。本書でも指摘されている通り、1948年の済州島4・3事件と南朝鮮での5・1単独選挙実施の間に、在日朝鮮人の4・24教育闘争とその弾圧が挟まっているのは、偶然ではない。

38度線を挟んでソ連軍と対峙していた南朝鮮での検閲は、日本以上に反共政策が前面に押し出されたものだった。米軍政庁は当初、南朝鮮での言論の自由を保障するかのような措置をとりつつも、一方では日本の朝鮮総督府による言論統制のための法律の温存を行った。米軍政期の南朝鮮内の文学作品の検閲については、在日朝鮮人のケースと同様、削除指示やいくつかの雑誌や詩集等の発売禁止や押収など、数えるほどの事例しかないが、代わりに左派作家の検挙といった身体的、暴力的なものとして、表現の取締りは発現した⁹。ソ連との関係悪化が顕在化する第一次米ソ共同委員会休会の頃、米軍政庁は軍政法令88号を布告し、登録制から許可制へと言論の許可制規定を変更した。このようにして、植民地期のような事前検閲が復活したのは、早くも1946年5月のことである。その後、大韓民国の樹立と同時に米軍政庁は廃止され、その検閲作業は韓国政府に引き継がれた¹⁰。

米軍の朝鮮に対する無知と蔑視は、アジア太平洋戦争で一戦を交えた日本(人)への態度とは異なる態度を朝鮮人に対して取らせた。それは当然、在日朝鮮人への態度や検閲にも影響したことだろう。たとえば、南朝鮮軍政庁で一時期アドバイザーとして勤務していたコリアン・アメリカン作家のヨンヒル・カンが、日本に居住する朝鮮人たちが相変わらず日本政府から弾圧を受け、米軍もそれに加担してい

⁹ 林京順(和田圭弘訳)「新たな禁忌の形成と階層化された検閲機構としての文壇」(『検閲の帝国』新曜社、2014年)。

¹⁰ その直後の1948年10月に起きた、済州島四・三蜂起の鎮圧に向かった韓国軍が政府に反旗を翻した麗順事件を契機に、韓国政府は作品の押収と販売禁止、左派文学者たちの拘禁、体制側へ転向した旧左派文学者の監視や執筆禁止という「文学界の左派的傾向を根底から切り崩す政策」(林京順)を進めていった。

る、と1947年7月に公開書簡で記し、GHQ内部で問題となったこともあった¹¹。

在日朝鮮人にとって、家族離散を含め生死を決するほどの意味を持った日本と南朝鮮／韓国の国境線は、双方の地を占領支配した米軍にとっては、重要なものではなかった。米軍兵士の日本－南朝鮮間の移動は日常的に行われたし、韓国軍将校を東京のGHQ本部に呼び寄せることすら難しくはなかった。たとえば、韓国海軍少佐だった延禎は、ウィロビーによって米国陸軍少佐の仮階級を与えられ、1949年に東京へ派遣されている。延禎は日本軍学徒兵出身の朝鮮人であり、G-2の秘密諜報機関であるZ機関（キャノン機関）で朝鮮半島の諜報を担当し、米軍の仁川上陸作戦の準備にも関わった人物である¹²。朝鮮戦争へと至る米ソの対立激化の過程で、在日朝鮮人の思想と表現の監視と取締りが、日本から朝鮮半島までの地理的広がりを持って行われたことは、このような人の移動からもうかがえる。

以上が、日本人の表現物を対象にした検閲研究から引き出された理論や法則の適用や応用にとどまらず、在日朝鮮人に対する検閲状況そのものを内在的に検証する作業もまた、不可欠だと考える所以である。

2. 金達寿と「カノン」

（闇市の）象徴化の過程に介入する国家主義をあぶり出し「戦後日本」の枠にとられない空間像を提示することを目指す。そのためにあえて、占領期日本の都市空間を論じる際に頻繁に参照されてきた、いわゆるカノンとして見なされる映画や文学作品を扱い、これまでの批評

が陥ってきた〈焼跡〉の論理、あるいはナショナルランドスケープ
国民的地景の軀から外れた物語の解釈を試みる。(30頁)

『〈焼跡〉の戦後空間論』第二部では、日本の「国家主義」を超えた空間のイメージを提示するため、まず、ポストコロニアル批評の定石であるカノン（本書の場合は「日本文学」）の読み換え作業が行われた。その後、第八章と第九章ではそういった国民的地景の軀から外れる存在＝物語を語る主体として、在日朝鮮人作家の金達寿を論じている。「八・一五以後」や「四斗樽の婆さん」といった伝記的作品を丹念に読み込み、それらの作品をオールタナティブな国民的風景を提示するものとして蘇らせようとするものだ。

この項で筆者が問いたいのは、なぜ他の在日作家ではなく金達寿なのかという点である。占領期の在日朝鮮人による日本語作品のうち、本書のテーマに沿う内容を含むものがごく限定されているため、選択の余地なく取り上げた、という事情はむしろあるだろう。だが、ここで問題にしているのは、本書における金達寿の位置づけについてである。本書では、権威やカノン正典を備えた「日本文学」に、そのような文学システムに孤独に立ち向かう「抵抗者」として、金達寿を対置させているようにみえる。金達寿作品はもちろん「日本文学」のカノンではないが、「在日朝鮮人文学」の文脈でみればなら紛れもなくカノンである。この二重性をどのように考え、扱うべきなのだろうか。

戦後／解放後／占領期の日本における朝鮮人作家たちの文学活動は、1910年代生まれを中心とする、当時20代後半から30代にかけての男性知識人たちが中心となって始められた。作家の朝鮮語能力の不十分さ、朝鮮語

¹¹ “July Issue of THE KOREAN TIMES”, G-2, GHQ Inter-office Memorandum, 1947.9.6., NARA2, RG331, Box8521, 00073 Foreign Publication.

¹² 延禎はウィロビー回顧録を日本で出版した人物でもある。C. A. ウィロビー著、延禎訳『知られざる日本占領：ウィロビー回顧録』（番長書房、1973年）、C. A. ウィロビー著、延禎監修、平塚証緒編『GHQ 知られざる諜報戦：新版ウィロビー回顧録』（山川出版社、2011年）

印刷施設の不足、朝鮮語を読める読者の少なさ、そして未来の読者の育成の意味合いも帯びていた朝鮮語教育の弾圧、といった困難の中で、朝鮮語での創作運動は細々と、しかし着実に命脈をつないでいた。日本敗戦の時点で、すでに日本語能力の方が高かった在日作家たちの大半がバイリンガル作家になっていったのは、このような脱植民地化運動の流れの中にいたからである。

そのような動きをよそに、終始一貫して日本語を使用し、日本人読者に向けて書くことを志向した金達寿は、むしろ特異だったといえる。敗戦後の新たな「日本文学」の創出において、被抑圧民族枠を必要としたいわゆる進歩的日本文学研究者たちは、金達寿という日本語作家を発見し、朝鮮人文学者としての役割を彼に期待した。一方、金達寿は、朝鮮語をほとんど解さなかったにもかかわらず、長い植民地時代とその後の混沌の中で、近代的な「国民文学」の体裁すら整えられていなかった「朝鮮文学」を語ることで、それに応えようとする¹³。

占領初期の日本で繰り広げられた、朝鮮人作家と日本人作家の間のこの奇妙な「国際交流」が、金達寿作品の在日朝鮮人文学における「カノン」としての地位の土台となっている。占領初期に大きな影響力を誇った日本人左派知識人や読者からの支持、日本文学研究者との交友関係、知名度の高さといった「日本文学」という権威の威光は、作品発表の機会の多さ、作品の単行本出版、作品集刊行、研究対象化といった具合に——その規模は「日本文学」から見ればごく微々たるものであれ——、現在にまでその影を長く伸ばしている。

金達寿がこの時期に周囲の在日朝鮮人の生活を書きえた理由、逆に言うなら、他の作家

がそのような主題についてさほど書かなかった理由も、このことと一部関連している。李殷直や朴元俊といった他の在日作家たちは、創刊と廃刊を短い周期で繰り返す不安定な在日メディアで、日本語や朝鮮語を用いて執筆活動をしていた。主な主題としたのは、それまでは自由に書けなかった植民地期の同胞たちだった。また、当時の日本人読者は、朝鮮半島を舞台にした“エキゾチック”な作品をより好んだ¹⁴。そのような状況下で、地べたを這うような在日朝鮮人の生活を、限られた執筆の機会を使い、あえて日本人に向けて日本語で書こうというモチベーションを持つ作家が少なかったのは、自然なことだっただろう。

対する金達寿も「後裔の街」などで植民地期の朝鮮人を書いた。だが金達寿の場合、在日メディアの他に、日本人発行の媒体（『新日本文学』、『思潮』、『東京民報』、『勤労者文学』、『文学時標』等）にも発表先があったため、より様々な主題に手を伸ばしやすかったということがあったとみられる。むしろ、日本の「私小説」の影響で、もともと身辺雑記的な作品を好んで書いたということも、彼が周囲の在日同胞たちを多く書き留めた理由の一つといえよう。

もし、このような金達寿作品の「在日朝鮮人文学」におけるカノン性の検討を行わないまま、金達寿のみに「日本文学」の代案としてオールタナティブの場所を与え続けるのだとしたら、それは、「在日朝鮮人文学」を一枚岩的なものとみなすことによって、そのさらなる周縁化を呼び込むことにはならないだろうか。

「戦後日本」で差異を示し続ける在日朝鮮人という存在とその歴史は、「異郷」である「戦後日本」という空間に対してだけで

¹³ 当初、『新日本文学』誌に金達寿が寄稿した記事の大半は、「北朝鮮の文学」、「朝鮮文学における民族意識のながれ」、「新しい朝鮮文学について」、「八・一五以後の朝鮮文学」、「朝鮮南北の文学情勢」、「朝鮮文学の史のおぼえがき」などといった、朝鮮半島の朝鮮文学についてのものだった。

¹⁴ 「在日朝鮮人を描くと読み手がなくなる」という問題は、1950年代半ばの大阪で金時鐘を中心とした『ゼンダレ』に集まった在日二世青年たちの間でも提起された。つまり、朝鮮半島の朝鮮人を書く日本人読者に読まれるが、日本人と同じ空間に居住する在日朝鮮人を描くと、見向きもされなくなるというものである。

はなく、それを構築した国民国家の枠組み、そしてその中心が定めた法による排除と囲い込みの仕組みを構築した近代的論理とは別の論理を、抵抗として提示する可能性を持っている〔後略〕。(282頁)

本書が「在日朝鮮人という存在とその歴史」そのものが、国民国家の枠組みに「抵抗として提示する可能性を持つ」というとき、それらの「戦後日本」に占めるべき場所は、すでに本書によって定められている。「朝鮮と朝鮮人」とに対する日本人の誤った認識を正す¹⁵ことが執筆活動の原点であったように、たしかに金達寿の場合は、そのような場所を占めることを自ら志向した。だが、「在日朝鮮人という存在とその歴史」は、今なお、そのような窮屈そうにもみえる空間にのみ、留めおかれるべきなのだろうか。

3. 在日朝鮮女性はどこにいるのか

生活の描写が単なる現実の反映ではなく、その生きがための必死の戦いにこそ、イデオロギー主導の教条的な主義として固定化されない、その現場性が描出されるものとして捉えたい。一方で、在日朝鮮人のなかでもとりわけ女性の声を前面に押し出すことも、本章で取り組みたい。〔中略〕この二つの目的——教条主義に陥らない思想／運動の現場性を抽出することと在日朝鮮人女性の声をすくい取ること——は、相互に関連している。(292-293頁)

本書第九章「「おかみさんたち」のたたかい」は、占領期の在日朝鮮女性の表象をめぐる考

察に充てられている。朝鮮女性たちが携わった濁酒づくりの取締りを、「第三人」神話と「闇市」へと繋げる日本のメディアと政治言説、さらに共産主義の脅威とみなしていった、GHQと日本政府の政策の変化へと結びつける手づきは鮮やかで、この章は、本書全体の説得力を強めるものともなっている。

朝鮮半島から日本へ渡った在日一世女性に対する日本社会での関心は、2000年代初め頃から高まった。一世女性たちの高齢化が、記録保存に向けた危機意識を呼び起こしたこと、オーラルヒストリーの重要性が認識されてきたことなどが相まった結果である¹⁶。アカデミアにおいては、聞き取り調査のほか、朴慶植の『在日朝鮮人関連資料集成（戦後編）』（不二出版、2000-2001年）刊行等によって、戦後／解放後の在日朝鮮人発行媒体の公開が進んだこともあり、相対的に資料の残っている女性たちの民族教育闘争や濁酒闘争の研究などが進むようになった。本書はこのような動きを敏感に捉えたものである。

本書では、金達寿が作品の中で「組織的背景を持つ男性知識人」と「学校に集まる「おかみさんたち」を代表とした部落の人々」とを対置させ、女性たちの主体的な闘いを描出していると指摘し、そこに「組織」の教条主義を超えていくような、思想の「現場性」を見出す。そして、女性たちが闘いの主体となったことを描き出した一連の作品は、「自らの運動の単位である「民族」の内部の差異を提示することによって、そしてその差異こそが本来の運動の源であることを示（323頁）」した、「たたかい」の本質を捉えたものと解釈される。

冒頭の引用文でも言明されているように、本書で金達寿の作品は、教条主義的な知識人男性—生活感情の中から抵抗運動の担い手と

¹⁵ これは元容徳による『民主朝鮮』創刊辞の一節だが、この部分は金達寿のアイディアによるものだった。

¹⁶ むくげの会編『身世打鈴 在日朝鮮女性の半生』東都書房、1972年、朴日粉・金潤順『生涯現役——在日朝鮮人愛と闘いの物語』（同時代社、2004年）、朴日粉『いつもお天道さまが守ってくれた——在日ハルモニ・ハラボジの物語』（梨の木社、2011年）、かわさきのハルモニ・ハラボジと結ぶ二〇〇〇人ネットワーク生活史聞き書き・編集委員会『在日コリアン女性二〇人の軌跡——国境を越え、私はこうして生きてきた』明石書店、2009年等。

なっていく女性、という二項対立の構図で読まれる。本書では、「おかみさんたち」を女性全体として一般化し、男性への対立項としての固定的な図式にはめ込んでしまうような危険性もあるだろう（321頁）」というように、この問題についても十分に自覚的であるが、在日朝鮮人たちが関わった抵抗運動の図式化や、女性たちを本質主義的に把握するという問題を回避する方途は、本当になかったのだろうか。ここでは、この問題を考える糸口として、日本社会から疎外されていた当時の在日朝鮮人たちが、民族組織を離れて生きていくこと自体が困難な状況で、教育闘争の主体となったような女性たちの運動も、実際には朝連組織と完全に離れて行われたわけではないこと¹⁷、当時の女性たちの抵抗運動には、朝連傘下の在日本朝鮮女性同盟という女性「組織」が強い影響力を持っていたという事実があり、そこでは母性の強化や、在日女性組織内での教条主義の問題も生じたことを記すにとどめる。

第九章では、教育闘争と濁酒闘争という二つの「たたかい」を先行研究から抽出し、テキスト分析のための理論化作業を行っている。だが、その過程では、「占領期の朝鮮女性のたたかい」の理想化、特権化という問題が生じているようである。たとえば、朝鮮人学校閉鎖令が出された1949年を境に、朝鮮女性たちの運動が消滅し、その後しばらくして総連「組織」が学校を再建したかのように認識されている箇所、それが垣間見える¹⁸。アカデミアの言説上の「在日朝鮮人女性」を追うだけでは見えない、女性たちの日々の生活を想像することこそが、彼女たちの占めた空間を浮かび

上がらせるためにはまず必要ではないか。

本稿を閉じるにあたり、1950年代初めの民族教育闘争を描いた、金民^{ソプニ}「西粉の抗議」を紹介したい。作者の金民（1924-1981）は、朝鮮戦争の勃発前後に日本へ亡命した朝鮮人男性で、1952年頃から作品発表を始めた二言語作家である。在日朝鮮女性の生活をつぶさに観察し、寄り添うような筆致で多くの女性像を形象した。SCAP/GHQによる検閲が実施されていた時期には創作活動を行っていないが、前述した在日朝鮮人文学における「カノン」や女性表象の問題を考察する上で、興味深い参照項となると考える。

「西粉の抗議」は1953年に日本語で、翌年1954年に朝鮮語で発表されており、両者の内容には異同も多いが、ここでは最初に書かれた日本語版を見てみたい。夫を亡くした40歳過ぎのソプニは、焼酎造りと日雇い労働と養豚を掛け持ちして生計を立てながら、東京都立朝鮮学校に通う9歳の息子を育てている。ある日ソプニは、東京都教育庁への朝鮮学校弾圧に対する抗議活動に、近所の七星婆さんと連れ立って参加することになる。500人余りの朝鮮人たちの怒りを込めた抗議にも悠然と沈黙を守る、日本人の教育長課長を前にしたソプニは、思わず課長の前に進み出て、日本語で自らの思いを次のようにぶちまける。

「え？ 朝鮮人の子供、あきめくらにするつもりだ？ 戦争の…戦争のお金はあるだろ、出せ、さ、出せ」「え？ 朝鮮人は、私は、わたくしは、何も分からないだ。字も分からないんだ。さ、私にも、勉強

¹⁷ すぐ後に述べる金民の短編「西粉の抗議」（1953年）には、「反動」という、いかにも政治的な用語が、朝連影響下にあった人々の間で日常的に使われていた様子が書き込まれている。関わらない者、組織を裏切る者、李承晩を支持する者という意味で用いられた語である。仕事に行くから今日は抗議活動に参加できないと言う主人公の西粉を、近所の「七星婆さん」が軽口を叩くようにたしなめるときに用いるのも、この「バンドン」である。ここからは、当時の女性たちもまた、知識人男性主導の組織の論理を内面化していたことがうかがえる。ただし、そうだとしても、女性たちの「主体性」は残る。

¹⁸ これについては、以下のような事実を挙げておきたい。朝鮮人学校が閉鎖された後は、たしかに学校の規模は大幅に縮小したが、それに代わる場として、東京都立朝鮮学校をはじめ、兵庫や愛知などの自主学校、公立朝鮮人分校、民族学級、午後夜間学校などでの民族教育が模索され、一世や二世の女性たちもその運営に関わった。また、1949年9月の朝連強制解散以後、在日朝鮮人文学運動が下火になり、出版活動も停滞していた時期に、朝鮮語詩集である南時雨『春の便り』（1953年）を刊行したのは、東京都立朝鮮人学校オモニ（母親）連絡会だった。

在日朝鮮人の占める空間をめぐる

させろ、私はあきめくらだ、あきめくらだ
あきめくらだ」「あんた達は、こんな所に
座っている。私達は字もよめない。貧乏
だ。私は、文字も分からない。ゴマカシ
てばかりいて、何とか言え、いえ、いえ、
いわんか」

(「西粉の抗議」『文学報』1953年8月、
9-10頁)

民族教育を潰そうとする者への怒り、日本から毎日のように故郷へ爆撃機を送り出す米国および日本政府への憤激、貧困と字が読めないことに対する悔しさが混在した、たどたどしくも力強い異議申し立てを行う女性の姿が、鮮やかに捉えられた作品である¹⁹。だが、このような作品も作家も、「日本（語）文学」においては全く認知されていないのが現実である。

おわりに

本書を通して読みながら、在日朝鮮人史や文学作品と結びついた、本書の不在の中心である米国／米国人の姿を、筆者はそこかしこに見るようだった。阪神教育闘争のさなか、銃を構えた米兵の前に躍り出て「自分を撃て」と叫んだ朝鮮人の老婆²⁰。李恢成『百年の旅人たち』で、GHQの押送列車で青森からの長旅を終えて到着した佐世保援護局で、サハリン帰りの朝鮮人たちが見た風にはためく星条旗。その佐世保で、闇市の取締りに従事していたエドワード・サイデンステッカー、彼が通ったコロラド大学に付設された米海軍語学学校で日本語講師をした、朝鮮人の Lee Chang Hai。金石範の短編「炸裂する闇」でダイナマイト自殺を遂げる、元 GHQ 通訳の在日青年、朝鮮文出版物の検閲草稿に頻出する、手書きで記された GHQ 検閲者“Chung”のサイン²¹ そし

て、SCAP／GHQの検閲に関わった多くの日系二世たち（およびごく少数の朝鮮系二世）。

「戦後空間」は、本書第五章「田村泰次郎「肉体の門」論」に登場する日本人復員兵の伊吹と、彼と同世代の日系や朝鮮系二世の米兵たちが遭遇したかもしれない場、それらの米兵たちがこれから沖縄や朝鮮半島へと向かう、あるいは戻ってくる場でもある。

本稿では、最後の二章についてしか論じられなかったが、本書との出会いが、朝鮮や米国、さらには台湾、中国、沖縄、ソ連、英連邦軍の人々が交錯する場としての、日本の戦後空間への想像力をもかき立てられるような、刺激的で貴重な体験だったことを最後に記したい。

¹⁹ 宋恵媛「金民論：在日朝鮮女性を描いた小説家」『アジア太平洋研究センター年報』第15号（2018年3月）参照。

²⁰ 『女盟時報』1948年5月25日。

²¹ 占領期に朝鮮語文書の検閲を担当した朝鮮人は、‘Chung’の他に少なくとも2人おり、日本語文書の検閲に携わった朝鮮人も数人いる。詳しくは宋恵媛「GHQ内の朝鮮人通訳たち：検閲・非常事態宣言・朝鮮戦争」『アジア太平洋センター年報』第17号、2020年3月（予定）参照。